

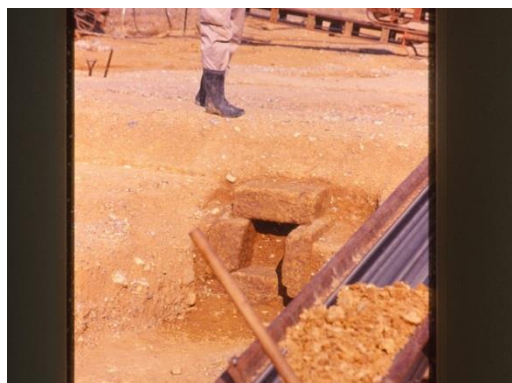
平 城 宮 跡 の 歩 き 方

西宮秀紀 (社会科教育講座)

平城京は、和銅元年 (710) に藤原京から遷都し、延暦 3 年 (784) に長岡京に遷都するまで、日本の首都であった。その間天平 12 (740) から同 17 年の間に恭仁宮・難波宮・紫香樂宮を都としたことがあったので、実質的にはほぼ 70 年間日本の首都であったことになる。短い期間ではあるが、平城京に都のあった時代は現在の日本の原型を作ったと言ってもよいと同時に、また特異な時代でもあった (詳細は拙著『日本古代の歴史 3 奈良の都と天平文化』参照)。

ちなみに、「平城京」は現在ヘイジョウキョウと読んでいるが、「平城」は呉音ではヒョウジョウ、漢音ではヘイゼイである。ただ、平城はナラという地名の当て字であり、2015 年に「奈良京」と記した木簡が出土しており、平城京遷都時頃からナラと呼ばれ、「奈良」とも表記していたことがわかった。

平城京は貴族から民衆まで住む都市であったが、その中心は京の北側に位置し、天皇が住み役所が置かれていた宮と呼ばれる部分であった。1959 年から奈良国立文化財研究所 (現在奈良文化財研究所) により、発掘が継続されており、筆者が奈良市に居住の 1981 年以來撮りためてきた発掘調査のスライド (第一次大極殿跡・第二次朝堂院跡及び大嘗宮跡・東院庭園跡・長屋王邸跡・左京三条二坊旧跡庭園跡などの発掘・遺跡写真) を映写しながら、半日で限なく歩けるコースを提示し、下記の政治史などと絡め平城宮内の遺跡、平城宮南に位置する長屋王邸や、左京三条二坊宮跡庭園などの発掘経緯や遺跡の見方などについて解説した。



第一次大極殿下の排水溝遺構



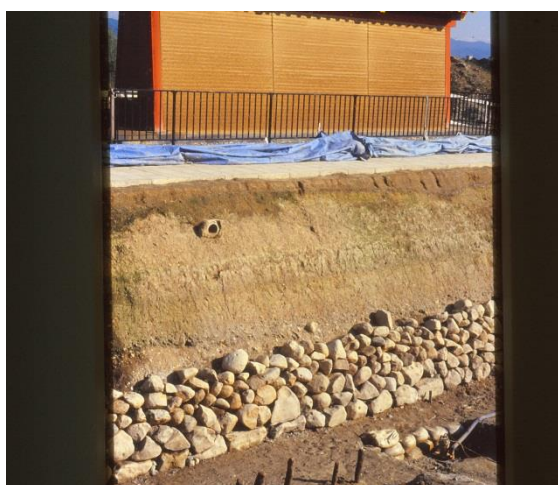
第二次朝堂院跡大嘗宮遺構

平城宮の歴史は、大きく前半と後半に分けられる。

まず前半は和銅元年（708）、平城京遷都の詔「四禽凶に叶ひ、三山鎮をなし、龜筮並に従ふ」から始まるが、実は慶雲3年（706）の文武天皇時代から計画されていたことがわかっている。和銅3年（710）3月10日に「都を平城に遷す」こととなった。しかし、近年の研究では、和銅3年3月の伊勢国安農郡の荷札木簡が第一次大極殿の築地回廊基壇下から発見（2002年）されており、平城遷都の時点で基壇が未完成だったことが判明している。大極殿は藤原宮大極殿を移転したもので、和銅8年（715）『続日本紀』の元日朝賀の大極殿は、第一次大極殿完成を述べたものとされている。また、平城宮は唐長安城の大明宮を模倣したもので、中央区は礎石建物の第一次大極殿と四堂からなる朝堂院（儀式空間）、東区は掘立柱の正殿（大安殿か、後半は第二次大極殿）と十二堂からなる朝堂院（日常政務空間）からなっていた。平城宮の東の張り出し部分（東宮）には、首皇子（後の聖武天皇）が住んでいたようだ。また、平城京左京九条一坊・二坊の南に十条大路まで設定されていたが、天平2年（730）頃までにその部分は廃棄されたようだ。その後も工事は続く中、神亀元年（724）聖武天皇が即位し、同6年（729）長屋王の変があった。長屋王邸跡は、デパート建設に伴い1986年から発掘が始まった。1988年8月にSD4750の



長屋王邸跡発掘遺構遠望



SD2700 側溝遺構東部分

南北溝状土壌が発見され、そこから約35324点の木簡が出土し、「長屋親王宮」に送られた鮑の荷札から、そこが長屋王邸であることが判明した。その後もSD5100から38449点出土（南路肩）、SD5300から35211点出土（北路肩）し、1989年7月には発掘総面積が約55000㎡（東西約240m×南北約230m）に及び、平城遷都から長屋王の変まで長屋王邸、その後没官され「皇后宮」や奈良時代末には「太政官厨家」となることが判明するなど、古代史に大きな成果をもたらした。

天平12年（740）に大宰少式であった藤原広嗣の乱が起こると、聖武天皇は突如関東行幸と称し平城宮を離れ、伊勢で広嗣が処刑された報告を受けたにもかかわらず、美濃・近江を巡行し山城に入り、恭仁宮遷都を宣言した。その後、同13年に国分寺建立の詔、同15年には紫香樂宮で大仏造営が開始され、同16年今度は難波宮に遷都し、結局同17年に平城京に還都し、大

仏は左京（外京）の東大寺で造営され天平勝宝4年（752）に開眼供養が行われたのである。その結果、中央区の第一次大極殿・東西回廊が恭仁宮へ運ばれ、後殿のみ残り掘立柱塀で遮蔽されていたが、聖武天皇が平城京に遷都してから、元正太上天皇宮（天平20年没）・聖武太上天皇宮となり、その後称徳天皇の西宮となったと想定されている。また、東区は礎石建物となり、第二次大極殿が建設された。また、平城宮の東の張り出し部分は称徳天皇時代に玉殿（離宮）、そして光仁天皇時代には楊梅宮と呼ばれたようだ。このように、奈良時代前半と後半とでは平城宮内は大きく様変わりしたことになる、平城宮遺跡を見て回る場合注意が必要である。

天平勝宝元年（749）孝謙天皇が即位し、同8歳（756）聖武太上天皇が没し、七七忌（四十九日）に600点余りの遺品が東大寺に奉獻され、正倉院の創設となった。同9歳橘奈良麻呂の乱が起こり反仲麻呂派が一掃されると、翌天平宝字2年（758）仲麻呂の傀儡である淳仁天皇が即位した。称徳が道鏡を重用しだすと仲麻呂との関係が悪化し、同8年（764）恵美押勝（藤原仲麻呂）は反乱を起こし破れ、近江で敗死した。その後、孝謙天皇が重祚し称徳天皇となり、天平神護元年（765）道鏡は太政大臣・禪師に、翌年法王となったが、称徳天皇が亡くなり、宝亀元年（770）光仁天皇が即位すると道鏡は下野に配流となり、同3年亡くなる。天応元年（781）桓武天皇が即位し、延暦3年（784）に長岡京に遷都、同13年（794）に平安京に遷都した。

その後、大同4年（809）平城天皇は嵯峨天皇に位を譲り、平城宮に移り住むが、翌年藤原薬子らが政権を取り戻そうとして失敗、平城太上天皇は平城宮に幽閉され、天長元年（824）に亡くなった。その後、貞観6年（864）頃、平城京の道路は田畑になっていたという。

平城京は、江戸時代に北浦定政の「平城大内敷地図」から研究が始まり、棚田嘉十郎（1860～1921）の努力によって守られ、その後1952年特別史跡となった。1953年には宮内を東西に走る一条通の拡幅工事で内裏の回廊状遺構発見され、1959年から奈良国立文化財研究所によって、恒常的調査が始まる。1960年代には、宮西南部で近鉄の検車区建設計画され、宮西半部も特別史跡追加、また国道24号線バイパスの計画が宮東辺張り出し部にかかることと判明したため変更されたり、何回かの危機に見舞われたが、そのつど市民を巻き込んだ反対運動が起こり、現在見るような保護された姿となった。長屋王邸跡はバブル期の発掘でもあり、残念ながらデパートや駐車場の地下に埋もれることになったが、現在閉店となっている。しかし、左京三条二坊の宮跡庭園遺跡の一部に建てられた史跡文化センターが近年取り壊された後、遺跡として保存活用されているように、今後遺跡として保存活用が望ましい。

平城宮を歩く際には、歴史と遺跡知識、そして文化財がどのように保存活用されているか、知っておくことが肝要である。